

第Ⅱ章 大湯環状列石関連遺跡調査について

1 調査の目的

これまで実施してきた大湯環状列石の発掘調査で、環状列石造営期と同時期の竪穴住居跡を万座環状列石の北西側・南西側の台地縁、さらに野中堂環状列石に隣接して計16棟を検出した。この戸数は大規模な環状列石に比べ、それに見あう数とは言い難い。このようなことから大湯環状列石周辺の遺跡の概要を把握するため、同時期の遺跡を対象に調査することとした。

調査は平成16年度から10年にわたり実施し、その対象は18遺跡・1地区(第24図)で、その調査概要は第1表のとおりである。

2 調査の方法

調査対象遺跡の摘出にあたり、環状列石の構築石材である川原石、特に主体を占めている石英閃緑玢岩の採取地点と想定した安久谷川中流域の折戸地区、および米代川の対岸である高屋館跡との関係から、大湯環状列石を中心に半径5kmの範囲内に所在する遺跡とした。

現地での調査は地形を考慮し、これまで調査された縄文時代の遺跡の占地、遺構分布を参考に、幅1m～2m、長さ任意のトレンチを設定した。なお、本調査以前に面的な調査がされた遺跡については、その報告書を参考にトレンチを設定した。

遺構確認は、大湯浮石層(十和田a降下火山灰)除去後、その下層を層毎に掘り下げ、遺構確認に努めた。確認された遺構については平板測量後に写真記録を行い、出土遺物の取り上げはカードを作成し、層位毎に取り上げた。

3 調査の成果

調査成果は下記のとおりである。詳細は各報告書を参照。

第1表 大湯環状列石周辺遺跡調査概要

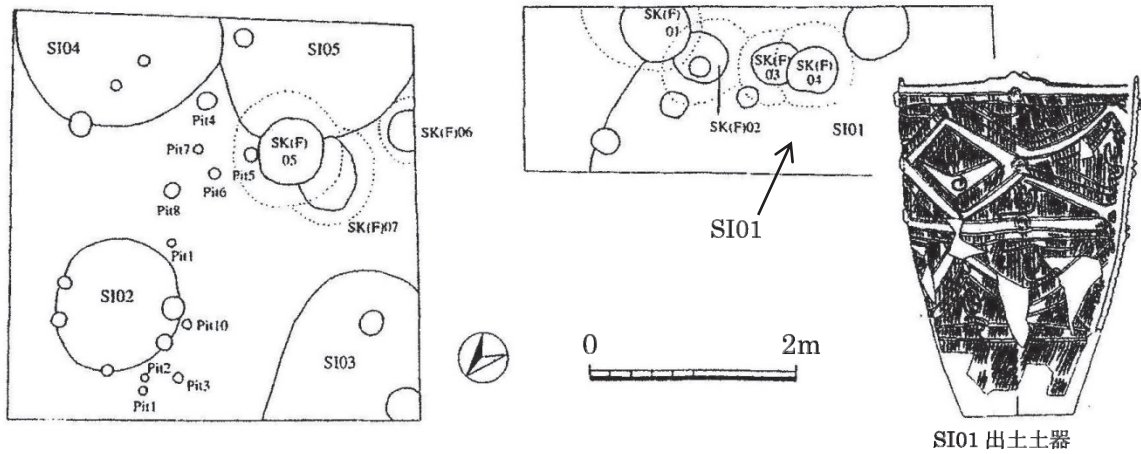
調査年度	遺跡名	検出遺構と出土遺物
平成16年度	松舟遺跡	◆大湯環状列石の東側約5km地点。根市川右岸に立地。 ◆竪穴住居跡4棟、土坑2基、柱穴状ピット1基、溝状遺構1条、縄文土器破片、石器。◆後期の集落跡。広範囲に遺構が広がる可能性が高い。
平成17年度	蛇沢遺跡	◆大湯環状列石の南東側約5.5km地点、寺鉢川左岸に立地。 ◆縄文土器(晩期)、弥生土器破片、土師器破片、石器が出土。
平成18年度	草木A遺跡	◆大湯環状列石とは豊真木沢川を隔てた台地の南側に立地。 ◆石囲炉2基、竪穴住居跡(平安)1棟、縄文土器破片(晩期)、土偶、土器片利用土製品、石器。◆昭和47年大規模農道建設に伴い一部調査がされて、後期末葉の土器が出土。本調査において、晩期前葉の土器、石囲炉が検出された。後期末葉から晩期前葉の集落跡であった可能性が高い。

平成 18 年度	丸館Ⅳ遺跡	◆大湯環状列石の南東約 1.2 km、豊真木沢川の左岸に立地。◆縄文土器破片(晩期)。◆大湯環状列石ののる台地南端部。遺物包含地。
平成 19 年度	小清水遺跡	◆大湯川左岸、大湯環状列石の北側約 2 kmの台地縁に立地。耕作の際、抜き取られたと思われる川原石が野積みされていた。◆堅穴住居跡 1 棟(縄文後期)、縄文土器破片。◆台地縁より平安時代の集落を検出。
	上屋布Ⅱ遺跡	◆大湯環状列石の北側約 1.5 kmの台地縁に立地。縄文土器破片が出土。
平成 20 年度	高屋館跡	◆米代川左岸段丘に立地。標高は 150m。◆平成元(1989)年に県教委調査。環状列石 1 基とこれを取り囲む掘立柱建物跡 24 棟を検出。◆平成 20 年度に市教委が追調査し、径 34m の環状列石であることが判明した。
	三ツ権現Ⅰ遺跡	◆高屋館跡と沢を挟み南側に立地。標高は 150m。◆縄文後期土器破片が出土。◆堅穴住居跡(平安)を検出。
平成 21 年度	堤尻Ⅰ遺跡	◆黒又山の南西側裾野。◆縄文土器破片が出土。
	申ヶ野Ⅴ遺跡	◆大湯環状列石の南西側約 1 km。◆焼土遺構、縄文土器破片が検出・出土。
平成 22 年度	下内野Ⅱ遺跡	◆黒森山の南側裾野に形成された台地。標高は 225m。◆平成 11 年度に調査。縄文中期後半の堅穴住居跡、フラスコ状土坑を検出。後期の土器も含まれ、狩猟文土器が出土。
	下内野Ⅲ遺跡	◆黒森山の南側裾野に形成された台地。標高は 219m。 ◆環状配石遺構 2 基、配石遺構 3 基を検出。後期土器のほか鐔形土製品が出土。
平成 23 年度	下内野Ⅲ遺跡	◆追調査を実施し、石囲炉を検出。
	折戸遺跡	◆石英閃緑玢岩の供給源である諸助山に近く、安久谷川上流に位置する。標高は 250m。◆縄文後期後葉の土器破片が出土。
	野中平Ⅲ遺跡	◆大湯環状列石南西側に接して位置する。◆焼土遺構を検出。
平成 24 年度	黒森山麓堅穴群	◆黒森山の南側裾野に立地。◆昭和 44 年、45 年に発掘調査を実施。複式炉をもった中期後半の堅穴住居跡 5 棟を検出。追調査を行ったが当時の調査区や遺構は確認できなかった。
	小黒森山遺跡	◆黒森山の斜面に形成された小さな平場。◆堅穴住居跡 1 棟(後期前葉)を検出。 ◆大規模の集落は想定できない。
	下内野Ⅳ遺跡	◆黒森山の南側裾野に立地。◆縄文土器(中期中葉)が出土。 ◆抜き取られた大型の川原石が野積みされている。
	下内野Ⅴ遺跡	◆黒森山の南側裾野に立地。◆堅穴住居跡 2 棟検出、前期～後期前葉の土器破片が出土。◆集落としての可能性あり。
平成 25 年度	下内野Ⅴ遺跡	◆追調査で配石遺構を確認。
	大湯上内野地区	◆黒森山の南側裾野に立地。 ◆新たに 3 遺跡を確認。配石遺構を持つ遺跡も含まれる。

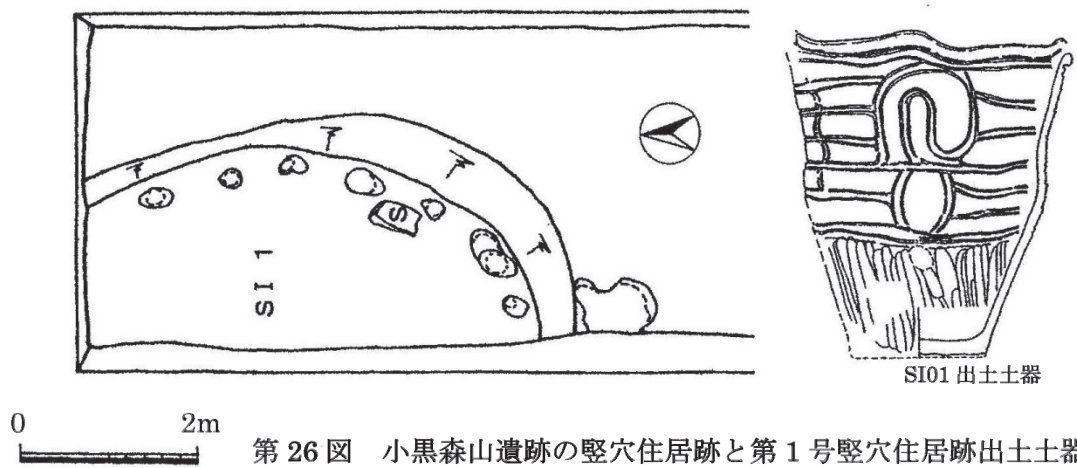


第 24 図 大湯環状列石関連遺跡の位置

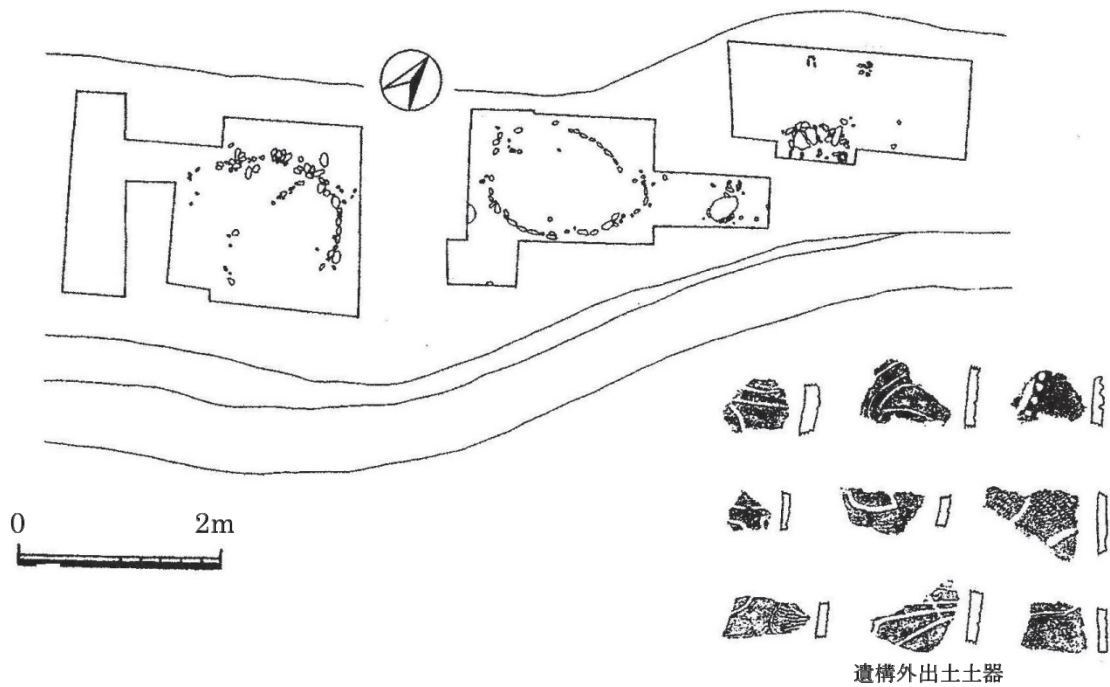
0 4km



第 25 図 下内野Ⅱ遺跡遺構配置図と第 1 号竪穴住居跡出土土器



第 26 図 小黒森山遺跡の竪穴住居跡と第 1 号竪穴住居跡出土土器



第 27 図 下内野Ⅲ遺跡遺構配置図と遺構外出土土器

第 24 図は、大湯環状列石周辺の環状列石と同時期またはこれと前後する時期の遺跡で、確認調査を行った遺跡の位置である。

下内野Ⅱ遺跡(第 25 図)は、黒森山麓遺跡群から南西側に 600m 離れた台地縁辺に位置し、眼下に大湯川を望むことができる。携帯電話電波塔建設に先立って約 100 m²が調査され、竪穴住居跡 6 棟、フラスコ状土坑 7 基などが密集・重複して検出した。中期の縄文土器のほか、狩猟文土器を含む後期前葉(前十腰内式～十腰内Ⅰa 式)の土器片も多量に出土した。周辺の土器散布状況からその中心は台地縁に沿い北東側に大きく広がっている。後期集落を検出できる可能性は高く、中期末葉から後期をつなぐ遺跡として重要である。

黒森山麓裾野に広がる河岸段丘西端には下内野Ⅲ遺跡(第 27 図)が所在する。昭和 58(1984)年に周知の遺跡として登録され、遺跡発見届には配石遺構として届けられている。発見当時から大湯環状列石の構築材と同じ石英閃緑玢岩が段丘縁に野積みされ注目されていた遺跡である。聞き取り調査によると「土器や石器などが多量に出土していた。石は野菜の作付けに邪魔になるから抜き取った」とのことである。届出された図面と調査区を照らし合わせると西側に 50m 程離れた下内野Ⅲ遺跡と同一の遺跡と判断され、大規模な遺跡であることが予想できる。検出した環状配石遺構は、大湯環状列石で検出した遺構と同形状を呈する。出土遺物として後期土器(十腰内Ⅰ式)や鐸形土製品が出土しており、大湯環状列石と同時期に存在していた可能性がある。また、追調査によって石囲炉を検出し、住居跡(群)の存在も想定される。

小黒森山遺跡(第 26 図)は、黒森山の南側の斜面に形成された小規模な平場に位置している。楕円形を呈する掘り込みの深い竪穴住居跡 1 棟が検出され、住居床面直上から弧線文・波状文を主文様とする後期前葉の深鉢が出土した。

黒森山山麓遺跡と大湯川を挟み、大湯環状列石ののる台地基部には小清水遺跡が所在する。台地から大湯温泉市街地へ下る在郷坂の北東側に位置し、石英閃緑玢岩の礫が山積みとなっている。調査によって台地縁辺に大規模な平安時代の集落が検出されたが、その東側内陸部から後期前葉の竪穴住居跡 1 棟を検出した。この遺跡は約 10,000 m²の平坦地に広がっていることから配石遺構(群)や集落が発見される可能性が高い。

4 調査のまとめ

大湯環状列石と同時期、関連性の強いと思われる 18 遺跡と 1 地区を選定し、確認(試掘)調査を実施した。そのうち強い関連性を示す遺跡として小清水遺跡、黒森山麓遺跡、小黒森山遺跡、下内野Ⅱ遺跡、下内野Ⅲ遺跡のほか、上内野地区がある。

下内野Ⅱ遺跡の調査は約 100 m²と小規模であったが縄文中期末の竪穴住居跡 5 棟、フラスコ状土坑 7 基のほか中期末葉から後期前葉の土器片が出土した。中期末葉の大規模な集落が想定される。調査区東側に後期土器の遺物散布地が広がっていることから後期集落が発見される確率が極めて高い。

この下内野Ⅱ遺跡と大湯川を挟み位置する小清水遺跡からは多量の石英閃緑玢岩とともに、後期の竪穴住居跡 1 棟が検出しており、配石遺構群や竪穴住居跡群の存在が想定できる。

下内野Ⅲ遺跡から配石遺構や環状配石遺構、出土遺物として後期前葉土器片のほか、鐸形土製品やキノコ形土製品が出土した。後期中葉土器を含んでいないことから環状配石遺構の初現が後期前葉であることを示唆している。また、隣接する下内野Ⅳ遺跡からは竪穴住居が検出さ

れ、遺構・遺物とも大湯環状列石と共通する要素を持つ遺跡として注目される。

第4図～8図に市内の縄文早期から晩期の遺跡分布図を掲載した。早期、前期は遺跡数も少なく、中期には遺跡数を増す。後期に入ると遺跡数がさらに増え、市内全域に分布し、晩期に再び減少していく傾向を読み取ることができる。

配石遺構を持つ遺跡は早期～前期に属するものは検出されておらず、中期後半になると集落(天戸森遺跡)に伴って出現する。後期に入ると配石遺構(群)単独の小規模な遺跡(駒林遺跡、下砂沢遺跡)や堅穴住居跡や掘立柱建物跡を伴う大規模な配石遺構群(環状列石)が現れる。後期中葉以降は遺跡が減少する傾向が見られ、配石遺構を持つ遺跡は市内では見受けられなくなり、晩期には日時計状組石を伴った玉内遺跡が再度出現する。

鹿角市や小坂町の配石遺構分布をみると、最も南側に位置する遺跡は玉内遺跡であり、北側は中小坂遺跡である。この玉内遺跡を南限に米代川を北上すると、花輪地域では天戸森遺跡、後期末葉から晩期の案内Ⅱ遺跡があるが遺跡数は少ない。この米代川と合流する大湯川の中流域から下流域には、中期末の黒森山山麓遺跡、後期前葉の大湯環状列石、下内野Ⅲ遺跡、下砂沢遺跡等があり、その分布密度は極めて高くなり、構築時期が集中する。この地域では配石遺構を伴う大規模な遺跡が大湯環状列石以降は造営されていないことから、大湯環状列石はそれまでに配石遺構(群)を伴った遺跡を集約した遺跡と考えられる。

一方、中通台地と対峙する米代川左岸段丘上に高屋館跡が所在するが、米代川左岸で配石遺構を持つ遺跡は高屋館跡以降は追加されていない。

大湯環状列石や高屋館跡の大規模な遺跡は後期前葉で途絶え、しかも配石遺構群(墓域)を持った遺跡が検出されていないことが特徴といえる。

大湯川流域の遺跡から検出された配石遺構の構築石材は石英閃緑玢岩が主体を占め、安山岩がこれに続き、大湯環状列石とその組成上位は共通する傾向にある。しかし、高屋館跡の主要構築石材は安山岩・珪岩・玄武岩・凝灰岩等で構成され、共通する石材が多いものの石英閃緑玢岩は見られない。これは石材の供給源や採取地域が異なることを示しており、高屋館跡の石材採取地が東側眼下の米代川であったと想定できる。

大湯環状列石、高屋館跡はいずれも配石遺構が円環を描き、さらに、その外側に沿って掘立柱建物が配置されるという類似性を持つが、高屋館跡は明確な二重の円環を示していない。しかも配石遺構は整った形態を示すものは少なく、石列的なものが多く見受けられることは大湯環状列石との大きな違いである。構築時期や社会構造を理解するうえで、興味深く、今後の周辺遺跡の調査に期待したい。